

高等学校芸術科書道における 鑑賞指導に関する研究

神 野 雄 二

序

書道教育における鑑賞指導の在り方は現今最も重要な課題の一つといえる。そのことは、『高等学校学習指導要領解説』芸術編からもわかる。^(注1)本研究は、単なる教室における授業から脱却し、実際の展覧会活動を通してそれに関して考察したものである。

私は、熊本市現代美術館で開催した個展^(注2)の折、二〇一三年五月二五日、同館において、アーティストトークを行った。その際、展示作品の鑑賞の手引きを作成した。これを鑑賞の事例として提示し、書道教育における鑑賞指導の在り方を考えてみたい。篆刻と刻書に関しては、『永和』（一三五号）に執筆した「書道教育における鑑賞指導の研究―個展

出品の篆刻と刻書を通して―」^(注3)を加筆修正した。鑑賞文は、「ですます体」を採用した。

一、作品鑑賞「書」について

展示作品の鑑賞の手引きは、授業において教材として使用した。内容や表現は学生達の理解とともに一般の来館者にも理解しやすいように平明なものとした。以下にまず「書」に関する手引きを掲出する。作品は纏めて後掲する。

挨拶

この度、私こと個展に際し、ご多忙中にもかかわらずご来駕いただき、心から感謝申し上げます。

私は、その時々自分として、ただ一生懸命書き、刻して

まいりました。書の不思議なる世界を追いかけてきた足跡です。本展では「人間讃歌」をテーマに、書芸術の新たな可能性を追求してみました。

これを機に、これまでの作品の変遷を振り返り、今後の制作に生かす所存でございます。何卒ご高覧ご批評賜りたく存じます。

ここに主要展示作品の鑑賞の手引きを作成しましたので、ご参考にさせていただきますならば幸いです。

本日は本当に有難うございました。

二〇一三年

神野雄二（大光） 拝

①書・「広島・長崎」二〇〇六年 各七四・九×五〇・八cm
墨・紙・軸装（図1）

憎越ながら、私が「歴史数字書」と命名した独自の表現による作品です。この表現のきっかけとなったのが、一九八九年、埼玉県東松山市にある原爆の図丸木美術館において、「原爆の図」で有名な画家の丸木位里氏・俊氏夫妻の作品を鑑賞したことでした。

この作品は、「広島・長崎」シリーズの一つです。広島と長崎に原爆が投下された年月・日時を、中国最古の文字である甲骨文を素材として書きました。広島の一九四五年八月六

日八時一五分、長崎の一九四五年八月九日一一時二分。戦争は絶対反対、核の使用は絶対反対。平和への思いを筆に託しました。これは、昨年亡くなられた漫画『はだしのゲン』で著名な漫画家沢啓治氏と懇談した際、共通の認識で一致したことです。

甲骨文字は今から三〇〇〇年以上前の古代の文字で、精霊が宿しているとも称されています。亀の甲羅や牛の骨に刻まれた一センチ寸法に満たない小さな文字ですが、造形豊かで美しい。私が最も好む文字です。

書は、線（神線）、形（心形）、気韻（書魂）が大切と考えています。それが表現されていれば嬉しい限りです。

②書・「広島・長崎・沖縄」二〇一〇年 一三七・〇×三三・五cm
墨・紙・軸装（図2）

「広島・長崎・沖縄」シリーズの一連の作品の一つです。沖縄で開催されました第二六回国際蘭亭筆会書法展に出品しました。平和の抽象書です。広島と長崎に原爆が投下された年月・日時と、沖縄の慰霊の日（終戦記念の日）です。広島の一九四五年八月六日八時一五分、長崎の一九四五年八月九日一一時二分、沖縄の一九四五年六月二三日。世界に通用する素材であるアラビア数字（洋数字）を用いて書きました。アラビア数字（洋数字）は、私が探しに探していた素材です。

③書・「峠三吉詩」二〇〇八年 一三四・八×六八・三 cm

墨・紙・軸装(図3)

詩人峠三吉(とうげさんきち)の『原爆詩集』の序です。

左手で、紙に筆を擦り付けるようにして、何も考えず書ききりました。紙が破れようが、紙面からはみ出そうが気にせず、思いの丈をおつけました。今回の出品作に、同様の詩を折帖に揮毫したのも展示してあります。

私は、一九九〇年に広島を初めて訪れましたが、原爆ドームの破壊の凄まじさに、呆然と立ち尽くしました。その後、広島・長崎を何度も訪れ、取りつかれたように歩き回り写真を撮りました。ただ、原爆を投下した人間の悪魔が憎かった。被爆者の方々にも体験をお聞きしたが、その真実を知りたかったからです。

近年、女優の吉永小百合さんが、この詩を朗読されています。吉永さんは、この「序」から始められ、「生ましめんかな」「折づる」(栗原貞子)は、必ず読まれるとのこと。広島を舞台にした『愛と死の記録』への出演、『夢千代日記』(NHK)で原爆症に苦しむ主人公を演じたことがきっかけとなり、昭和六一年(一九八六)からボランティアで原爆詩の朗読会を始められたそうです。現在では女優としての活動のほか、反戦・反核運動をライフワークとして原爆詩を朗読されています。機会があれば、一度お会いしたいものです。

④書・「FUKUSHIMA」二〇一二年 一三四・二×三

三・八 cm 墨・紙・軸装(図4)

この作品は、祈りの書です。書の歴史に、宗教家の書が多くあります。一宗派の伝道のためのものが多いが、「祈り」とはもともと深く人間に直結したものだと思います。私は、平和のため、人間の幸福のため、書を書き続けたいと願っています。人間讃歌の、希望の書です。

かつて、私は、「ヒロシマ・ナガサキ・フクシマと、日本はなんとも宿業が深い。が、希望はある。」「(千書万香)通巻第七号、二〇一一年」と書きました。日本の日本人の蘇生の力を信じています。書の歴史の中に、一項目として「人間讃歌の書」「希望の書」のジャンルを設けてみたいものです。

⑤書・「龍飛鳳舞」一九九三年 各一三七・〇×六七・九 cm

墨・紙・軸装(図5)

「龍飛鳳舞」は、龍が飛び鳳凰が舞うように、書道で筆勢が雄勁(ゆうけい)で生き生きしている形容をいいます。龍が飛び鳳凰が舞い、この世に平和が訪れるという意味もあります。

行書体で力が内に籠るように表現しました。文字の形に自在な変化を持たせ、線は潤滑(墨をたつぷりとつけた線とかすれた線)を大切にしました。

二、作品鑑賞「篆刻・刻書」について

続いて「篆刻・刻書」に関する手引きを掲出する。

⑥篆刻・「土牛」一九九一年三三・四×二四・四cm 印泥・紙、額装(図6)

「土牛」(つちうし)は、私が書道を始めるキッカケを与えた慈父神野雲山との想地による素材です。修学前、悪戯をする牛舎に入られました。田舎では農作業のため農家の多くは牛を飼っていました。怖い思いをしました。父は、牛舎に土に描いて遊びました。それによるものです。父は、牛舎に私を置いて出て行く時、そっと振り返っていたことを覚えています。

金文体という、中国の古代文字を使用して、篆刻として刻しました。中国の石の材を用いて、印刀で刻し、印肉を付けて捺したものです。古代文字の豊かで美しく厳しくもある、形と線を追及しました。篆刻の朱の美しさは何ともいえません。「土」は象形文字で、まるめた土を台上に置いた形で、これを土地の神としました。「牛」は象形文字で、正面から見た牛の形です。

篆刻は力です。小手先の器用で作られた「つくりもの」は

篆刻といえません。単に形を整えるのが篆刻ではないのです。内から湧き上がってくる力感こそが、生命なのです。

芸術は生命があるかないか、生きているかどうかです。

⑦篆刻・「HIROSHIMA・NAGASAKI」二〇〇六年 三三・四×二四・四cm 印泥・紙、額装(図7)

「広島・長崎」シリーズ。僧越ながら、私が「歴史数字書」と命名した独自の表現による作品です。この表現のきっかけとなったのが、一九八九年、埼玉県東松山市にある原爆の図丸木美術館において、「原爆の図」で有名な画家の丸木位里氏・俊氏夫妻の作品を鑑賞したことでした。戦争は絶対反対核の使用は絶対反対。平和への思いを筆に託しました。これは、昨年亡くなられた漫画「はだしのゲン」で著名な漫画家中沢啓治氏と懇談した際、共通の認識で一致したことです。

まず、この篆刻の制作過程を明らかにしてみます。はじめに、篆刻の石印材を叩き割り、その組み合わせを考え、それに文字を刻します。一般的な方形の形が全く違った形となります。不定形になり、ここに想像が湧き立たせられます。それを、印泥や日本画や・版画で使用する朱の顔彩などを用いて和紙や版画紙に押します。

これまでの、古来の篆刻とは全く相違する制作方法で、私はこれを動く篆刻「M・S(ムービングシール)」と名付けて

います。

上部が広島に原爆が投下された年月・日時、一九四五年八月六日八時一五分、下部が長崎の一九四五年八月九日二時二分です。上部が女の子の横顔のようにも見え、不思議な感覚に陥ります。

⑧刻書・「人」一九九二年 三三・三×五五・〇×五・八cm

木・胡粉(図8)

刻書は「刻字」とも称し、木材などを素材に文字を美的に刻すことです。筆で書かれる書道とは異なり、立体的となります。彩色なども施し、工芸や彫刻などの芸術との関係も深く、戦後誕生した新しい書表現です。

古くは、東大寺西大門や唐招提寺の額が著名です。現代刻字は、明治時代頃から、篆刻家などが手掛けてきました。中村蘭台初世(らんたい)・二世、山田正平、北大路魯山人(ろさんじん)、山田桃源、小林石寿などが有名です。

「人」は荒々しいノミ彫りで、下書きもせず一気加勢に刻しました。彩色は胡粉の白色でしたが、風化し板材そのものの色となっています。色彩など剥げ落ちても、ノミ跡のみで、そのものを見せられる作品を目指し制作しました。古美を出すため土の中に数年埋めておきました。自然の力を借りました。力溢れる刻書はむしろ額装など必要ないでしょう。小細

工はいりません。私が最も自分を赤裸々に出せる表現形式が刻書です。

三、学生による個展への感想文

学生に授業の一環として、展覧会に参加して思うこと、また作品を鑑賞して思うこと、の感想文を書かせた。これには、学生が展覧会活動に参加しての素直な感想が書かれており、自分が教育の現場に立った時の鑑賞指導の在り方にまで言及する者もあり、実際に展覧会活動に携わることが、よりよい鑑賞指導の在り方について考えるに際し効果が大きいことが確認された。

○個展を鑑賞して、作家の表現の多様性や書的美が生で感じられた。強さ激しさとともに優しさが見られた。

○アーティストトークや鑑賞の手引きを参考として作品を鑑賞することにより、作家や作品の背景が理解でき鑑賞が深まった。

○展覧会の作業を実際に経験することにより、授業で理論として学んだことが自らの日常の中、社会生活で生かされる思いがした。

○日頃の表現と鑑賞が相互に関連していると思われ、書への

興味・関心が深まり生涯にわたって書を愛好したいと感じた。

○美術館で本物を鑑賞することの大切さを感じ、鑑賞指導で美について理解するには直接本物を見るしかないと思った。

○鑑賞と表現は車の両輪と言われるが、これは単に言葉で伝えても理解されにくいのが、美術館での作業をする中で実際の経験として感じられた。

○今回鑑賞して得た感動を自分の表現として取り入れたいと思われた。また将来高校の鑑賞の学習に取り入れたいと思った。

○書は作家の人間性が端的に表現する芸術だと改めて感じた。書は精神性が強く鑑賞する場合には、その書者の人間性にも触れるわけだ。鑑賞することは、書の美を享受しそれに陶酔し、それによって情操の陶冶に役立つと思った。得がたい経験であった。

四、一般来館者による個展への感想文

私は、個展に際し、会場に感想ノートを置いた。多くの一般来館者が感想を書き残してくださった。ここに紹介し、鑑賞の在り方を考える一助としたい。学生とは違った自身の生活者としての視点が見られ興味深い。作品制作はもちろん学

校教育の鑑賞や表現の在り方を考える上で大いに参考になるものである。

○すばらしかったです。

FUKUSHIMAや広島長崎・・・。「数字を書く」というのは考えませんでした。

詩だーと思いました。

○書のもつ芸術性に改めて感動致しました。

○もっと自由でいいんだーと思いました。

○「何かを描きたい何かを書きたい！」という思いを呼び覚ましてくださり感謝です。

○九〇年代の書と二〇〇〇年代の書では、先生に何か変化があったのかと思うほど違います。九〇年代は私でも何とか出来そうな気がしますが（馬鹿ですなスマセン・・・）、二〇〇〇年代のものは本質に迫っています。書は筆で、いや言葉を「刻む」ものかと思わせます。空間表現は正に言葉がそこに「存在」するようです。

○全ての作品を見たあと、私の頭の中は真っ白になりました。強烈なほどの何かがかけめぐって、言葉が出てきませんでした。力強さというよりも見る私に対しての、強いうったえや、壊れてしまいそうなほどの繊細さ、かと思えば、大きな染まらないやわらかさ。ああ、ここに来て良かったと

思いました。

○文字は文字だけではなくそのエネルギーを持っているなあと感じました。意味のある時間をすごせました。ありがとうございます。

○作品の生命力を体感しました。

自分の作品作り、出直します。作品を拝見しながら胸が熱くなりました。

○広島・長崎の前で立ち尽くしてしまいました。言葉にしようにすると難しいですが、心にずんとくる衝撃を受けました。かすれた部分の迫力が沁みます。峠三吉詩に目頭が熱くなりました。出会えてよかったです。有難うございます。

○今日の出会いで勇気と希望をいただきました。感謝いたします。

○今回このような作品展をみるのは初めてでしたが、絵画とは違った気持ちの表現があり、先生の気持ちが伝わってくる様でした。自分の中が、新しい発見となりました。また、直接お話を頂きありがとうございました。

○「鑑賞の手引き」を読み、アーティストトークを聞き、先生が作品制作のために、実際に広島や長崎に赴き、現地体験をしたからこそ、このように表現ができたのだと感動した。

五、マスコミによる展覧会紹介

個展の紹介がマスコミでされた。これも社会に発信する鑑賞の一方法である。記事の内容は各紙を閲覧願いたいだが、それぞれ見出しや内容の取り上げ方が相違しており、興味あるものとなっている。作品図版と文章内容が、単に展覧会の案内に留まるものと、かなり作品鑑賞に踏み込んだものがあつた。また筆者宛に読者から便りが数通届き、マスコミによる発信の大きさを感じた。発信の方法や内容を分析すると、一般大衆に如何に書を普及し理解を求めていくかの手がかかりが得られそうである。作品展の内容を短いたくさな言葉で紹介できているか、また作品の美をどのような評語で紹介するかが重要でありそうである。

一、楽篆第七一号「神野大光展―書と篆刻の世界―」(二〇一三年四月二〇日)

一、熊大通信「神野大光展―書と篆刻の世界―」(二〇一三年五月二日)

一、聖教新聞「書芸術の新たな可能性、平和への思いを筆に託して」(二〇一三年五月二日)

一、熊本市現代美術館アートキッスレター vol. 62「神野大

光―書と篆刻の世界―展」(二〇一三年五月二日)

一、西日本新聞「神野教授『書と篆刻の世界』平和への思い込めた50点」(二〇一三年五月二日)

一、熊本日々新聞「神野大光展―書と篆刻の世界―」(二〇一三年五月二六日)

一、朝日新聞「反戦の思い込め篆刻など50作品」(二〇一三年五月二八日)

一、朝日新聞「熊本情報」「神野大光展―書と篆刻(てんこく)の世界―」(二〇一三年五月三〇日)

一、新美新聞「神野大光展―書と篆刻の世界―」(二〇一三年六月二一日)

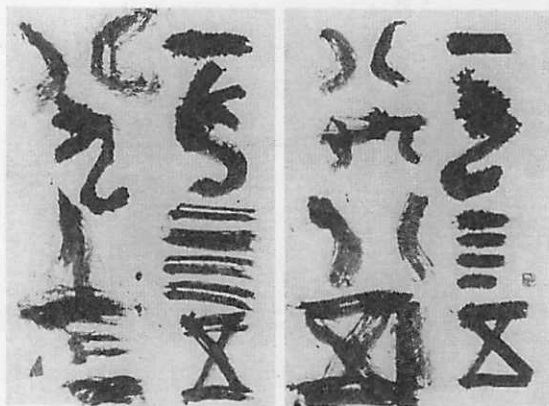
一、書道美術新聞「神野大光展」ひらく、「歴史数字書が、話題」(二〇一三年九月一五日)

一、テレビ放映、ケーブルTV、JCN熊本、デイリー熊本「第一回くまもと百科事典」(二〇一三年七月八日)

結

熊本市現代美術館で開催した個展という一つの展覧会を通して、鑑賞指導の在り方を考えてみた(図9)(図10)。学生が参加した個展を通しての、作品展示・写真撮影・アーティストトーク・ワークショップ・感想文の提出などの一連の作業

は、学校教育の鑑賞指導に大いに生かせることが分かった。学生達は、共に参加する中で得た実際の感動は何にも代えがたかったようだ。このたびの個展の一連の諸活動の中で、鑑賞指導教育は、教室での授業とともに、美術館での鑑賞指導が多大な成果を発揮するとの理解を得た。教室から社会への広がりをいかに考えていくかが、今後の書道教育を考えていくうえでのポイントとなりそうだ。今後も、社会に開かれた生きた鑑賞指導の在り方を考えてゆきたい。



(図1) 書・「広島・長崎」



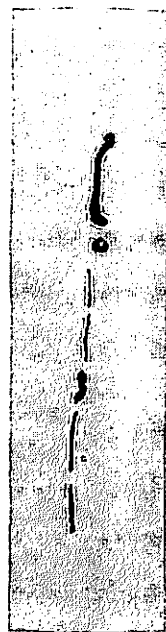
(图3) 書・「昨三吉時」



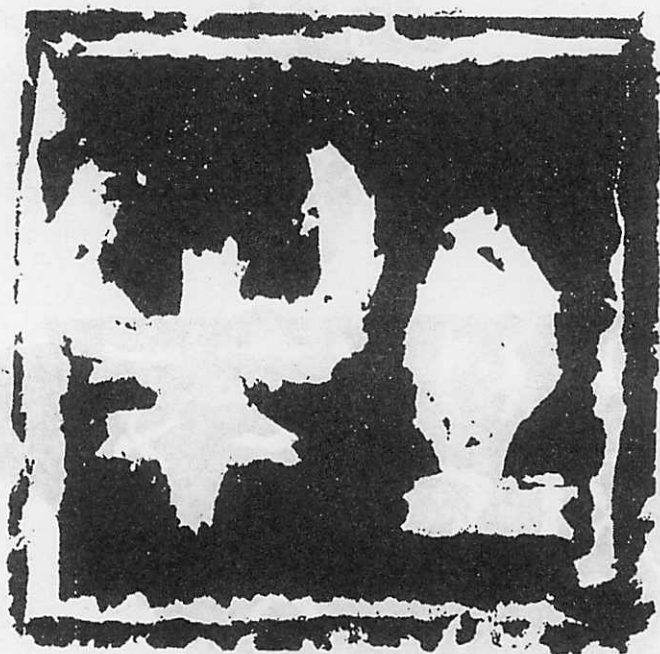
(图2) 書・「広島・長崎・沖縄」



(图5) 書・「龍飛鳳舞」



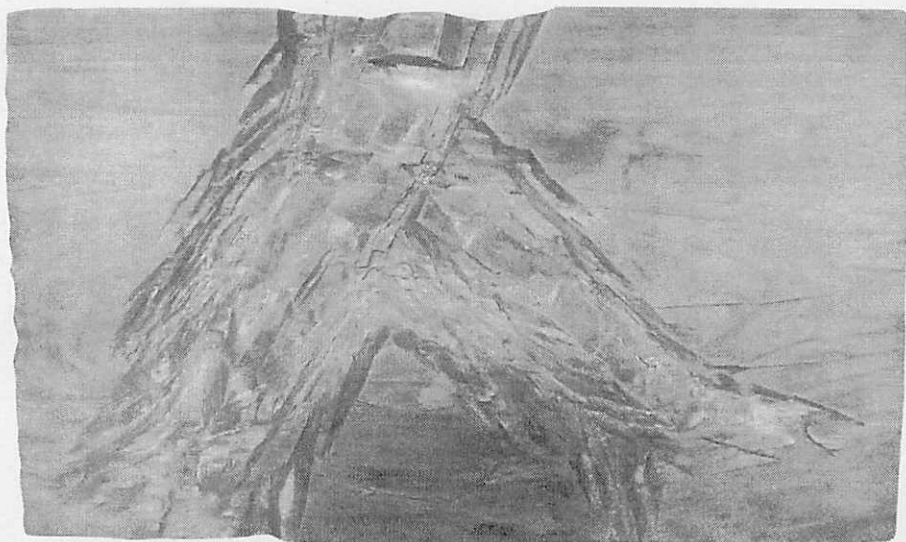
(图4) 書・「FUKUSHIMA」



(图6) 篆刻·「土牛」



(図7) 篆刻・[HIROSHIMA・NAGASAKI]



(图8) 刻書・「人」



(图9) 展覽會會場風景①



(图10) 展覽會會場風景②

参考文献

- ・加藤達成監修『書写・書道教育史資料』（東京法令出版株式会社、一九八四年六月）
- ・久米公著『書写書道教育要説』（萱原書房、一九八九年一月）
- ・『美術館における古美術鑑賞の実践 書跡作品の鑑賞教育推進』報告書（出光美術館、二〇〇六年三月）
- ・『高等学校芸術科書道指導資料・鑑賞編』（文部省・東山書房、一九八一年六月）
- ・下田章平・斎木久美『高等学校芸術科書道における鑑賞指導とその展開』（茨城大学教育実践研究）三二、二〇一三年）

注

- 1、文部科学省『高等学校学習指導要領解説』芸術編（教育出版、二〇〇九年十二月）の「第一節改訂の趣旨」（3）芸術（書道）に、「また、書の文化の継承と創造への視野を広げ、理解を深めるとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かにする観点から、鑑賞の学習が充実して行われるようにする。」とある。

2、神野大光展 ―書と篆刻の世界―

会期・二〇一三年五月一日（土）～七月六日（土）、開館・午前一〇時～午後八時、休館火曜日、会場・熊本市現代美術館
ギャラリーⅢ（熊本県熊本市中央区上通町二の三 びぶれす熊日会館三階）、電話・〇九六（二七八）七五〇〇

- 3、『永和』（二三五号、二〇一三年十一月、永和社）「書道教育における鑑賞指導の研究―個展出品の篆刻と刻書を通して―」

本研究は、平成二十五年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「日本の篆刻に関する基礎的研究」（課題番号KM1000-2152014400）による研究成果の一部である。

（じんの・ゆうじ 熊本大学教育学部教授）